

主の降誕（夜半）

（ルカ 2:1-14）

2012年12月24日

イエズス会司祭 小暮康久

今年もクリスマスの夜を迎えました。今夜がいつもの夜とは違う特別な夜であるという空気は、キリスト教の文化の根づいていないこの日本でも、街の中にはひっそりと流れているような気がします。クリスチャンでなかった私のクリスマスの思い出の中にも、その感覚はかすかにあったような気がします。

子供の頃の私にとって、クリスマスはやっぱり特別な日でした。小学校に上がる頃にはもうサンタクロースは信じていなかつたような気がしますが、それでもクリスマスは、冬休みが始まる日、家族でちょっとした御馳走とケーキを食べる日、そしておもちゃかゲームを買ってもらえる日であり、心がウキウキするような待ち遠しい日でした。クリスチャンでない家族の中に育った私にとっても、クリスマスはそういう意味で特別な日だったのです。

これだけならば、イエス様の誕生日とは何の関係もないのですが、そんな中で、わたしにクリスマスの夜の本当の意味を感じさせたのは一つの歌でした。「きよしこの夜」です。（カトリック聖歌集では「しずけき」ですね）今はどうかわかりませんが、私が小学生の頃には、音楽の教科書に「きよしこの夜」が載っていました。低学年の時だったでしょうか、音楽の時間にみんなでこの「きよしこの夜」を歌った時に、なんできれいで、静かで、そしてあたたかくて、安らかな曲なんだろうと思ったものです。「きよし、この夜、星はひかり、救いのみ子は、み母の胸に、ねむりたもう、ゆめやすく」。日本の普通の家族の中に生まれ、教会もクリスチャンもまったく見たことないような地方の田舎町で育った私にとって、キリスト教はもちろんのこと、この歌の歌詞の意味もよく分かっていなかったと思います。でも、この曲には、何も知らない私の心にも、「救いのみ子が、み母の胸にねむっている」ということは、「なんだかとてもいいことだ」というあたたかな気持ちを与える不思議な魅力がありました。

今夜、朗読されたルカ福音書は、まさにこの「きよしこの夜」について語られた部分です。日本でクリスマスの夜と言えば、まだまだ、サンタクロースや、街を賑わす華やかなイベントが真っ先に思い浮かぶのかもしれません、クリスマスの夜の本当のメッセージは、この「きよしこの夜」の歌詞が示すように、静かで、安らかな、世界を包み込むような神様の優しさと愛の訪れによって私たちに与えられる平安にこそあります。まさに、子供の頃の私が「なんだかとてもいいことだ」と感じた、「よい知らせ」であり、福音そのものです。

今日のルカだけでなく、マタイも記してくれた「クリスマスの夜」の物語は、マルコとヨハネにはありません。ルカとマタイがこの聖夜の物語を書き記してくれたことは、本当に大きな神様から私たちへのプレゼントだと思います。こんなに美しく、深い平安を与えてくれる物語が他にあるでしょうか。

ルカによれば、マリアとヨセフは、住民登録のために、ナザレからベツレヘムまでを移動しなければなりませんでした。ガリラヤ湖のはずれにあるナザレから、ずっと南の死海のは

ずれにあるベツレヘムまでは、150km 以上の旅になりますから、身重のマリアを気遣いながらの旅は何日も要する大変なものだったでしょう。その上、誕生の時の次第を、ルカはこう記しています。「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝させた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」

待降節に入ると目にする、あの「馬小屋」の光景です。「救いのみ子」は、幼い村娘マリアと、村大工ヨセフの名もなき夫婦、そして家畜たちが見守る中でお生まれになったのです。ベツレヘムの村はずれの家畜小屋は、ある意味で、華やかな宮殿や神殿、街の中心街の喧騒とは正反対の世界だったと思います。この幼い夫婦と家畜たちだけが息をひそめて見守る、本当に静かな、静かな夜だったと思います。これが「救いのみ子」の誕生の姿でした。

ある意味で、人間の赤ちゃんほど無力な存在はないでしょう。馬や牛の出産の場面などを見ると、彼らは生まれてすぐに自分の力で立ち上がります。しかし、人間の赤ちゃんは、自分の身を自分で守ることも出来ません。完全に自分を委ねるしかありません。しかも、この「救いのみ子」は、兵隊たちに警備された安全な宮殿の中の、温かいベッドの中ではなく、村はずれの家畜小屋で、名もなく貧しい幼い夫婦に、完全に自分を委ねて、安らかに眠っているのです。これほどまでの信頼があるでしょうか。貧しい小さな人間に自分の全てを委ねる神の姿、これほどまでに「小さなもの」となって、神は私たちのもとに来られたのです。そこには、神の人間に対する想像を超える愛の深さが表れていると思います。何故なら、愛は愚かしくも、計算せずに、まったく信頼して自分を委ねるからです。人間に対するなんという愛、なんという信頼でしょうか。

神が人間に自分の全てを委ねて、人間としてお生まれになったということは、神と人間の間に分かちがたい「決定的な絆」が生まれたことを示しています。「救いのみ子」の誕生は、人間の問題はもはや人間だけの問題ではなく、分かちがたく神ご自身の問題となったということを示しています。神ご自身が人間になられたからです。考えてみれば、これは途轍もないことなんです。こんな途轍もない事態を信じている宗教は、キリスト教以外一つもありません。神が人としてお生まれになった「救いのみ子」の誕生は、「もう、あなたたちを一人ぼっちにはしない。私は、これからはどんな時も、いつも、あなたたちと共にいて決して離れない」という神様の宣言なのです。

マタイはこの神様の宣言を、『「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。』と記しています。それは、神が、苦しむ私たちと共におられ、共に歩まれるということです。

ルカによれば、天使たちによって、この「よき知らせ」をはじめに知らされたのは、「羊飼いたち」でした。ご存じのように、安息日も羊の世話をしなければならない「羊飼いたち」は、当時の社会の中では、律法を守らない「罪びと」と見られていました。当時の宗教的な社会の中で、「罪びと」と言ったら、何よりも神の恵みを受けることのできない、神から見捨てられた者という意味でしたから、毎日、人々からそのような蔑みの目を向けられ続け、自分自身もそう感じながら、それでも生きていかなければならぬということが、どれほど切なく、辛いことであったか想像できます。その苦しみの中に置かれた「羊飼いたち」に、神は真っ先にこの「よき知らせ」を伝えたいと思い、天使たちを遣わしたのです。

また、マタイのクリスマスの物語も、神が苦しむ者とともに歩む神であることを記しています。生まれたばかりの幼子を抱えたマリアとヨセフは、ヘロデの迫害を逃れてエジプトに渡り、そこで生活しなければなりませんでした。言葉もわからないエジプトの地で幼子を抱えながら生活するということが、寄留者である若い夫婦にとってどれほど苦労の多いものであったか想像できます。

考えてみれば、「救いのみ子」イエスは、野宿者(Homeless)として馬小屋で生まれ、ヘロデの迫害を逃れて難民(Refugee)としてエジプトに渡り、エジプトの地では移住者(Migrant)として過ごしたのです。私たちの神は、そのはじめから、その誕生の時から、自らも、小さくされた者、苦しむ者となって、この世界で苦しみと切なさに涙する小さな人々と共に歩まれたのです。すべては、私たち人間への愛のためです。その姿勢は生涯変わることはありませんでした。私たちのために、馬小屋でお生まれになった「救いのみ子」の生涯は、私たちのために、十字架にかかるという最期で終わります。これが「救いのみ子」の姿です。

「きよしこの夜」の物語が、なぜあれほど美しく、静かで、あたたかく、そして安らかな気持ちを私たちに与えてくれるのか、それは、そこに、胸がいっぱいになるほどの大きな、大きな神様の愛が溢れているからでしょう。キリスト教のことなど何も知らなかった幼い私の心にも、きっとそれは届いていたのかもしれません。

現代の神学者E・ユンゲルは言います。「神はキリストにおいて苦しみと死を経験した。神は人間の苦しみと死を自分の現実として知っている。」と。

第一朗読では、「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」というイザヤの預言が朗読されました。「救いのみ子」の光を、本当に光として仰ぐことが出来るのは、何よりも、「闇の中を歩み、死の陰の地に住む」、苦しみの中に生きている人たちです。

私たちの日本に目を向ければ、今も東日本大震災と福島原発事故がもたらし続ける苦しみの中で、今夜のクリスマスを迎えている方々がいらっしゃいます。まだあの苦しみは終わっていません。しかし、私たちの「救いのみ子」は、そのような苦しみの中を生きる人々とともにいるため、共に歩むために、あの世界の片隅のような馬小屋でお生まれになったのです。東日本大震災と福島原発事故がもたらす苦しみの中で、このクリスマスの夜を迎えている方々のためにも祈りながら、「救いのみ子」の降誕に、心からの賛美と感謝を捧げて参りましょう。